様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２２日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２０３１５
研究課題名（和文）宋人題跋の文学的研究

研究課題名（英文）A Literary Study on Colophons of Song Dynasty

研究代表者
西上　勝　（NISHIGAMI MASARU）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：10189277

研究成果の概要（和文）：題跋とは、本来それぞれ本文の前後に置かれるはしがきを意味する語であったが、十一世紀宋代の文人、蘇軾と黄庭堅の手によって新たな散文ジャンルとしての地位を獲得した。本研究は、表現様式の一つとして確立した題跋の中国の文学上における意義を明らかにすることを目的とした。中でも、詩文や書よりも遅れて文人にふさわしい表現領域となった絵画を対象とした題跋に注目することによって、画家像の文学的形成の成立過程を解明することに意を払った。

研究成果の概要（英文）：Tiba , Chinese Colophon , originally means preface or postscript , but from the eleventh century Song dynasty onward it has became a new literary genre through works of Su-Shi and Huang-Tingjian. The purpose of my research is to explain the significance of colophons in Chinese literary history. And above all through taking notice of colophons on painting that is literati expression behind literary works and calligraphy I proved the formation process of the painter's images.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,0000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：中国文学

１．研究開始当初の背景

（１）本研究代表者は、本研究課題に着手するに先立って、中国近世、特に唐代及び宋代の古文家の散文作品を研究の対象としつつ、主として墓誌銘や論といった散文ジャンルに見られる家族意識や歴史観などのいくつかの個別的な課題をめぐって、具体的に作品を分析しつつ研究を重ねてきていた。

元来はそれぞれ「まえがき」と「あとがき」を指示する語に過ぎなかった題と跋は、序や記などといったそれらに先行して確固とした文体論上の地位を獲得していたジャンルとは異なり、書き手が書き手を取り巻く新しい境地や外界事物との間に新たな関わりを認知し、それを比較的自由に表現することできるジャンルとして成立したことが知られ

ていた。それでは、宋代以降に題跋が獲得していく新しい文学性とは一体何だったかが問われなければならない、という問題意識を持つに至った。題跋がジャンルとして成立して初めて可能になった表現の内容とは一体何か、また題跋をいかに用いて表現しようと試みられたのか、こうした問題を明らかにする必要があると思われたのである。題跋という散文表現様式が、中国の文学にどのような新しさをもたらすことになったか、このような課題を設定し、その解明を目指すことにしたのは、先ずこのような経緯からであった。

（２）上に記した経緯に加えて、文学研究とは別個の立場、すなわち中国絵画史研究領域において、題跋という表現様式の形成発展が絵画を詩文及び書とに密接に関係づけることになった、という指摘がつとになされていた。こうした美術史からの知見を、文学の領域からとらえ返してみることによって、中国の文学の変遷について新たな見地が獲得できると思量されたのである。言いかえれば、表現者の身辺に存在する事物や想像的境地が、詩文や書のみならず、それらと絵画とがいかに関係づけられるようになったのか、従前よりも一層克明にあとづける必要があり、それは改めて問い直されるだけの価値ある課題ではないかという着想を、中国美術史のこうした所見から得ていたのである。これが本研究課題の推進を着想したもう一つの理由であった。

２．研究の目的

（１）研究の背景に関する記述でも述べたように、本研究の目的は、題跋という散文ジャンルにおける文学的意義を究明することであった。題跋ジャンルは、十一世紀に新たな表現様式として確立し、同時代の文人たちに広く認知されるようになり、さらに後世広く活用されるようになったものであることが知られる。題跋の表現様式においては、どのような境地や外界の事物が、それに相応しい表現の対象として選択され、またどのような新たな表現方法を獲得することが目指されたのかを考究する。これが、本研究が先ず目指すべき第一の目的であった。

（２）題跋のジャンルとしての確立に先立ち、詩文や書に関してはすでに文学的評論の対象として認知されていた。詩文や書よりもずっと遅れて、知識人が親しむべき表現領域としての価値が認知されるようになったのが絵画であった。散文を用いたどのような表現行為の蓄積が、絵画を新たな価値ある表現領域として認知するのに関与し得たのか、言い換えれば散文による表現行為と絵画とがいかなる関係をとり結び得たのかを解明すること。これが本研究の第二の目的であった。

（３）題跋が対象として取り扱うことになった境地や外界の事物は、題跋に先立って文学ジャンルの中に確固たる地位を確立していた序や記といったジャンルのほか、史伝の一部、また詩話や筆記といった雑多な内容を記録する散文様式においても、表現の対象として選択されることがあった。これらの隣接する表現様式群に対し、題跋がいかなる独自性を有する表現領域たり得たのか。こうした課題についても解明を進める必要があった。上に記した二つの目的を推進すると同時に、題跋ジャンルの表現における独自性を明らかにするという問題についても、一定の見解を獲得すること。これが本研究の第三の目的であった。

３．研究の方法

（１）まず蘇軾と黄庭堅、二人の北宋期の文人の文集に集録された題跋類を研究の出発点として定めることにした。二人の題跋が扱う事物が、どのような種類の境地や事物であり、どのような特徴に着目をすることを通じて、表現が試みられているのかを明らかにすることから研究を開始することにした。

（２）次に蘇軾・黄庭堅の題跋作品をはじめとし、宋代の主要な題跋作品を集めている、明末の蔵書家・毛晋の編集にかかる叢書『津逮秘書』に収録された宋人題跋二十種に着目する。ここに集められた題跋をあまねく検討することを通じて、蘇軾と黄庭堅が開拓した表現意図が、彼らに続いた書き手によっていかに継承されているのかを検証してみることにした。

（３）題跋作品が多くの書き手によって書き蓄えられるに伴って、書家のみならず、画家についても彼らの伝記、作品の成り立ちやその手法上の特徴、その変遷などといった項目について記述することを意図した、いわゆる画史と呼ばれる書物の再編纂が継続して試みられるようになる。題跋で試みられていた表現が、画家の人物像形成にいかに関与したのかを、次に追跡検討してみることにした。

（４）文学様式として確立した題跋は、宋代以降から現代に至るまで、古典的散文の主要な表現様式として存続し活用され続ける。文人画家の社会的地位向上にしたがって、明代以降は宋代にも増してより数多くの題跋作品が書かれていく。明代及び清代の題跋及び画論を、可能な限り広く渉猟することにより、題跋の文学史上における意義の変遷を究明することを試みた。

４．研究成果

（１）毛晋が集録した二十家の宋人題跋作品の中でも、後世の中国、特に毛晋が生きた明末において、題跋を新たな文学ジャンルとして確立するに力あったいわば創始者として中国の文体史上で評価されていたのは、蘇軾

と黄庭堅、いわゆる蘇黄二家であった。二人の題跋作品は、明末以降に文学様式として普遍的になり後にいわゆる「小品文」と呼ばれる散文作品の模範作品と見なされ、各種の文学選集に著録されるようになる。

さらにまたその一方では、画家の伝記的事項を集録する画史の継続編集にも積極的に活用される。例えば、南宋の人、鄧椿が編纂した画継十巻は、蘇黄の絵画作品を対象とする題跋に示された絵画観や画家像に全面的に依拠した編集方針が採用されていることで知られる。

そこで、論文「蘇黄題跋と画人伝の成立」では、蘇黄の題画跋に焦点を絞って、唐代の張彦遠『歴代名画記』等の先行する画史書などとの比較検討を行った。題跋を用いて新たに試みられた表現の意義を明らかにすることを意図したのである。

（２）題跋が画史書という形で集積され、その中で提示される一定の画家像が成立すると、今度はさらにそうした画家によりふさわしい新たな画題との結びつきが希求されるようになる。墨竹、すなわち水墨による竹を画題とした絵画は、文人画家に似つかわしい表現領域として、急激に愛好の度合いを深めていく。竹は中国の知識人にとって、墨竹という絵画領域が開拓される以前から、好ましい豊かなイメージが蓄積されてきていた外界物ではあったが、詩文とそれを書記する道具である筆墨によって、外界の事物そのものが表現の対象となったところに墨竹の意義がある。しかし、墨竹が単なる筆墨のすさびであるのみならず、正当な表現行為として認知されるには、それに先立って竹の象徴を文字によって表現することの意義の他に、竹の形態を筆墨によって写し取る作画行為そのものの意義が、文学的に顕彰されていなければならなかった。後に墨竹画の名手として知られるようになる文同、彼の言動が蘇軾によって繰り返し表象され、さらにそこから宮廷絵画コレクションの分類概念として『宣和画譜』では、人物画や花鳥画と並んで、墨竹を一分類として設けるのも、墨竹をめぐる表現行為の意義が、広く認知されていればこそ可能な措置であったということができる。

論文「墨竹と文学」及び「『宣和画譜』小考」の二編は、主としてこうしたことの道筋を解明することを意図したものである。

（３）墨竹が文字使用者たる文人にふさわしい表現行為の一つと見なされるようになったとはいえ、本来、文章作成にのみ勤しむべき文人にとって、墨竹をも含む絵画制作は依然として墨戯、すなわち墨を用いた戯れ、素人芸という評価を免れ得なかった。しかし、墨竹やそこから派生した墨梅、墨菊といった画題は、文人画の主要なテーマとして持続継承されるばかりでなく、広汎な支持を獲得していく。蘇黄以降の題跋や後世の画論においては、筆墨をふるって絵画表現することは、もはや戯れというような自己弁護を伴わずに、その意義が積極的に主張されるようになった。例えば、明末清初の画家として名高い石濤は、その著書『画語録』において絵画表現の思想的意義を力説する。石濤が水墨による絵画表現行為を戯れなどと自ら呼ぶことはもはやなかった。価値を主張することが正当である、当然の行為と見なされているからである。墨竹のような画題に手を染めることが、戯れというような弁解味を帯びた表現ではなく、知識人にとっての正当な行為と認められるようになるためにも、題跋ジャンルは大きな役割を果たしたと考えられる。

「墨戯について」と題した論考では、このような表現行為に関わる価値観の転変に注目しその移り変わりを総括した論考である。

（４）上にも繰り返し述べたように本研究が最終的に目指していた目的は、題跋と称される散文ジャンルがもつ文学的意義を究明することであった。題跋はどのような現実を盛り込むことを意図した表現様式なのか、題跋がジャンルとして成立するに先立って存在していた史伝や序、記といったジャンルと区分され、新たな文学的達成を実現することができたのか、こうした問題を具体的に明らかにすることを目指して研究を推進した。

なかでも、とりわけ注意をはらったのは、画家の営みについて、題跋ではどう意義づけようとしているのかということであった。研究の最終年度たる平成２３年度においては、宋代文人の手によって文学的な価値を獲得した題跋という表現様式が、中国の近代的な画家像や芸術観にいかに作用を及ぼしたのかを具体的に明らかにすることに特に意をはらった。このような観点に立って特に宋代以降の題跋における書画評論に焦点を絞り、「痴癖」と指示される画家特有の資質がどのような評価の変遷をしてきたのか、その展開の系譜を、中国の近代芸術観の源流と見定めることができる明末清初の時代までを視野に収めながら解明することを試みた。「画人伝記と『痴癖』」と題して公表した論考を通じ、一定の見解を提示することができたと考えている。

（５）清末民国初年以降、中国画の方法と理論の整備を推進する立場と、西洋近代芸術の摂取を急務と主張する二つの立場に別れはするが、宋人題跋の文学的達成を継承して書き継がれた書画論や手記が、双方の立場に立つ画家自身あるいは画家の周辺に身を置いた文学者によって、多く書かれている。そうした資料の文学的な分析検討は、現在未だ手つかずのまま残された領域である。近現代中

国の書家や画家の営みが、急激に流入することになった西洋近代芸術観に抗して、いかなる展開をすることになったのか、本研究課題の成果を踏まえ、今後、こうした課題に継続して取り組むことにしたいと考えている。題跋の制作を通じて形成されてきた伝統的な芸術観が、新たな散文創作実践を通じてどのような変遷展開をすることになり、現代中国の芸術を支える文学表現の基盤となるに至っているのか、こうした問題意識を持ちつつ、継続して個別の課題を取り上げ具体的に探求していきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 西上　勝、画人伝記と「痴癖」－明末清初の画家・陳洪綬の画家像を中心に、山形大学人文学部研究年報、査読有、第９号、２０１２、１１－２９
② 西上　勝、墨戯について、山形大学紀要（人文科学）、査読有、第１７巻第２号、２０１１、１０７－１２０
③ 西上　勝、『宣和画譜』小考、山形大学紀要（人文科学）、査読有、第１７巻第１号、２０１０、１－１９
④ 西上　勝、蘇黄題跋と画人伝の成立、中国文史論叢（岡山大学）、査読有、第５号、２００９、１－２３
⑤ 西上　勝、墨竹と文学、東北大学中国語学文学論集、査読有、第１４号、２００９、４３－５６

〔学会発表〕（計１件）

① 西上　勝、墨戯の記憶、中国詩学会（五皓）、２０１０年８月２３日、国民宿舎・渋御殿湯

６．研究組織
(1)研究代表者
西上　勝　　(NISHIGAMI MASARU)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：１０１８９２７７